

つがるの昔っこ（昔話）⑧

なしてそうなったんだべず話こ① （標準語）



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ



さあ、今日は君たちに、なんでそんなちゃったの の話をおしえようかな。昔、赤倉に鬼が一匹住んでいました。この鬼は神様の家来でありましたが、だんだん神様の言うことをきかないで、盛んに人を殺して食べていました。

神様も困って、この鬼に『お前を下界に遣したのは、人を殺して食べさせるためではない。悪い獣や毒蛇をとりしずめさせるためにやったのじゃ』と言いましたが、この鬼はいっこうにききません。

神様はこの鬼を殺してしまうのはわけ無い事でありましたが、それだと不憫だと思い、鬼を広一野原の真ん中に連れて行って、『東の空から陽が昇らないうちに、ここにモッコ一つで土と石運んできて、大きい山を築け。見事それが出来たら今までの科（とが）は許してやる』と言って七里長浜の砂の上に頂が三つに割れたきれいな山の形を描いて見せました。



鬼はケラケラと笑って、得意の神通力を使って野原の土をゲロゲロと削ってモッコに入れて山盛りにしていきました。ザックラモッコラ、ザックラモッコラ、土を削って運んで、神様が描いて見せた山の形に仕上げていきました。



そして、もうモッコーつだけ運べば、山が出来てしまうところまで来た時、お陽様、東の空からニコカコーって昇ってきました。あっちの村、こっちの村からコケコッコーと一番鶏が鳴きました。約束の時間までに山が出来なかった鬼は神様によって天に連れ戻されて鎖に繋がれてしまいました。



そのため、この山は右肩がモッコーフ分だけ低くなって、鬼に削られた長い穴が川になりました。どうしてそうなったかという話でした。(岩木山と岩木川が出来たわけ)

つがるの昔っこ（昔話）⑧

なしてそうなったんだべず話こ② （標準語）



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ

次の話も鬼の話だ。
昔、長根派立、今の鬼沢村に弥十郎という男が居ました。岩木山に柴刈りに行っているうちに赤倉沢に居る鬼と仲良くなりました。山に行つては鬼と相撲とつて遊んだり、山菜とつたり、一緒に柴を集めたりしました。



力持ちの鬼は雑木を素早く抜いて蔓で束ねて弥十郎に持たせてあげました。
村の人たちは、この根がついたままの山の柴を見て不思議に思っていました。

ある年の事、その年は雨が少なくて、田も畑もズーッと枯れてしまいました。そして、その次の年も日照りで田んぼに引く水も干上がってしまい、食べるものが何も取れませんでした。



弥十郎が山に行った時に『おれの村、二年続きの日照りで、田も畑も枯れてしまう。これだとみんな死ななきゃならない、鬼よ、鬼よ、お前に何か良い分別ないかい』と言いました。

鬼はしばらく腕組んで考えていましたが、『それは困ったな、俺にいい分別がある。まかせておけ』



と言い、又、いっぱい柴抜いて弥十郎に背負わせて家に帰りました。



その晩、夜中に目をさましたら、水が流れる音が聞こえてきました。『わい』と思って外に出たら、そこには新しい堰（水路）が出来ていて、そこから田んぼの中に水が勢いよく流れていました。村の人たちもみんな出てきて、それを見てびっくりして飛び上がって喜びました。弥十郎は、これはきっとあの鬼の仕業だと思い村の人に話して聞かせました。

村の人は鬼に感謝して、それから誰からともなく、この長根派立を鬼の沢、鬼沢と呼ぶようになりました。



弥十郎と村の人達は鬼を神様として祭ることにして、立派な神社を建てました。鬼神社です。鬼沢では今でも節分の日『鬼は外』の豆まきはやらないそうです。どうしてそうなったかという話でした。

つがるの昔っこ（昔話）⑧

なしてそうなったんだべず話こ③ （標準語）



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ



昔、為信サマが津軽統一した時の頃の話です。その頃はまだ津軽は南部の領地でありました。南部の代官で南部高信という部将が石川の大仏のお城に居ました。為信という殿様は勇気も度胸もあって、おまけになかなか頭も働く人でありました。

十八の時に大浦城の城主になって、その後、堀越に移りました。その頃の堀越は小さい館で、石川にも近いことで石川に居る郡代の南部高信も少し気を許しておりました。

ある時、為信は石川に使いを出し、『堀越の館の土手が崩れたので修理したいがよろしいでしょうか?』と聞きました。石川城の家来が来て見分したところ、先頃の大風と雨とで館の土手がみんな崩れていました。高信は『修理してもよろしい』と許しました。

為信は早速、大浦から人部を沢山呼んで修理を始めました。その人夫というのはみんな家来の侍達でした。

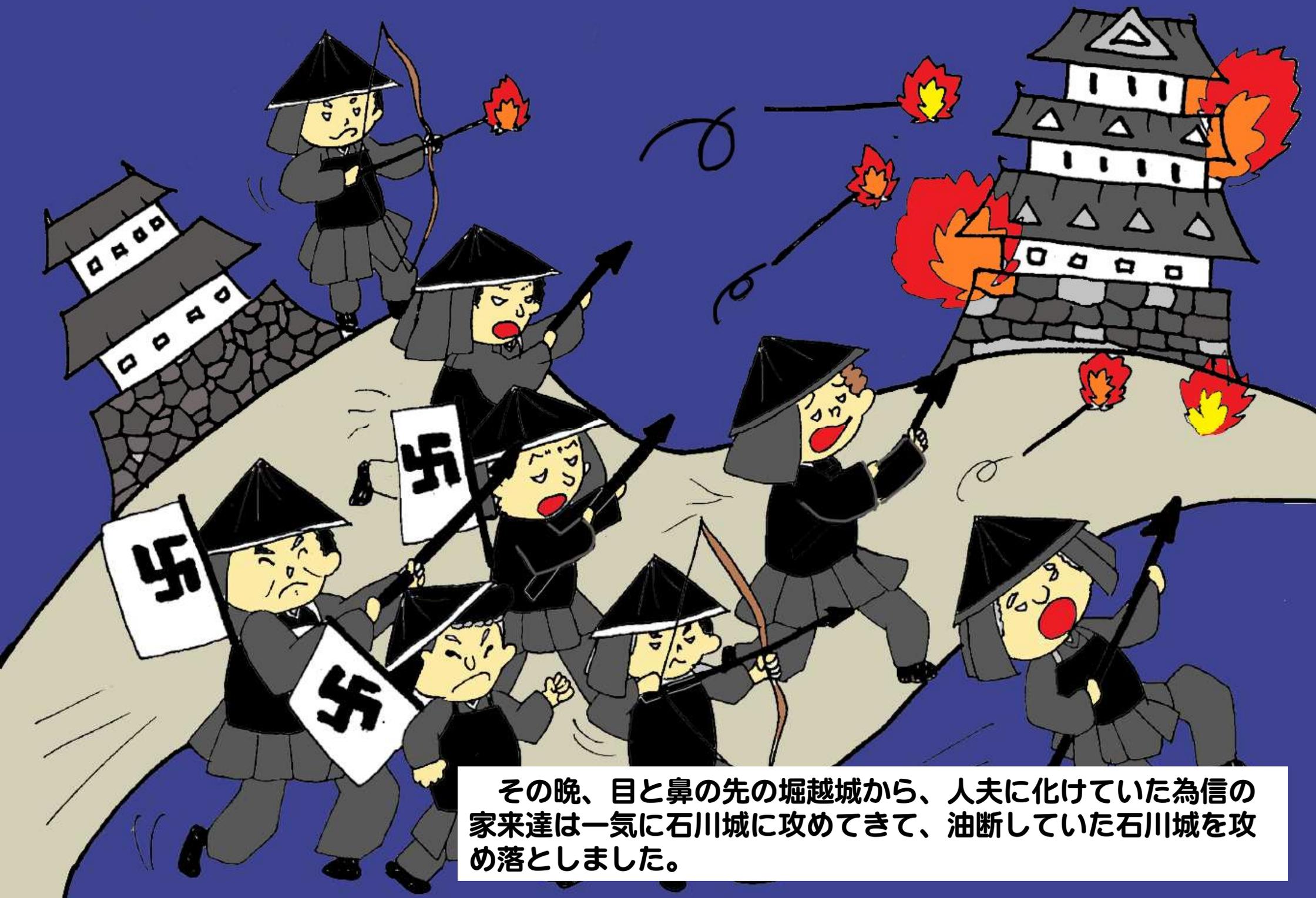
館の修理が大分出来たところで、『おかげ様をもちまして、堀越の修繕も終わりました。ついでに完成祝いをしたいので、ぜひお越しください。ただ、堀越のほうはまだいろいろ片付けがありますので、大浦のほうへどうぞ』と招きました。高信は石川城の重臣を三人を名大として大浦に行かせました。



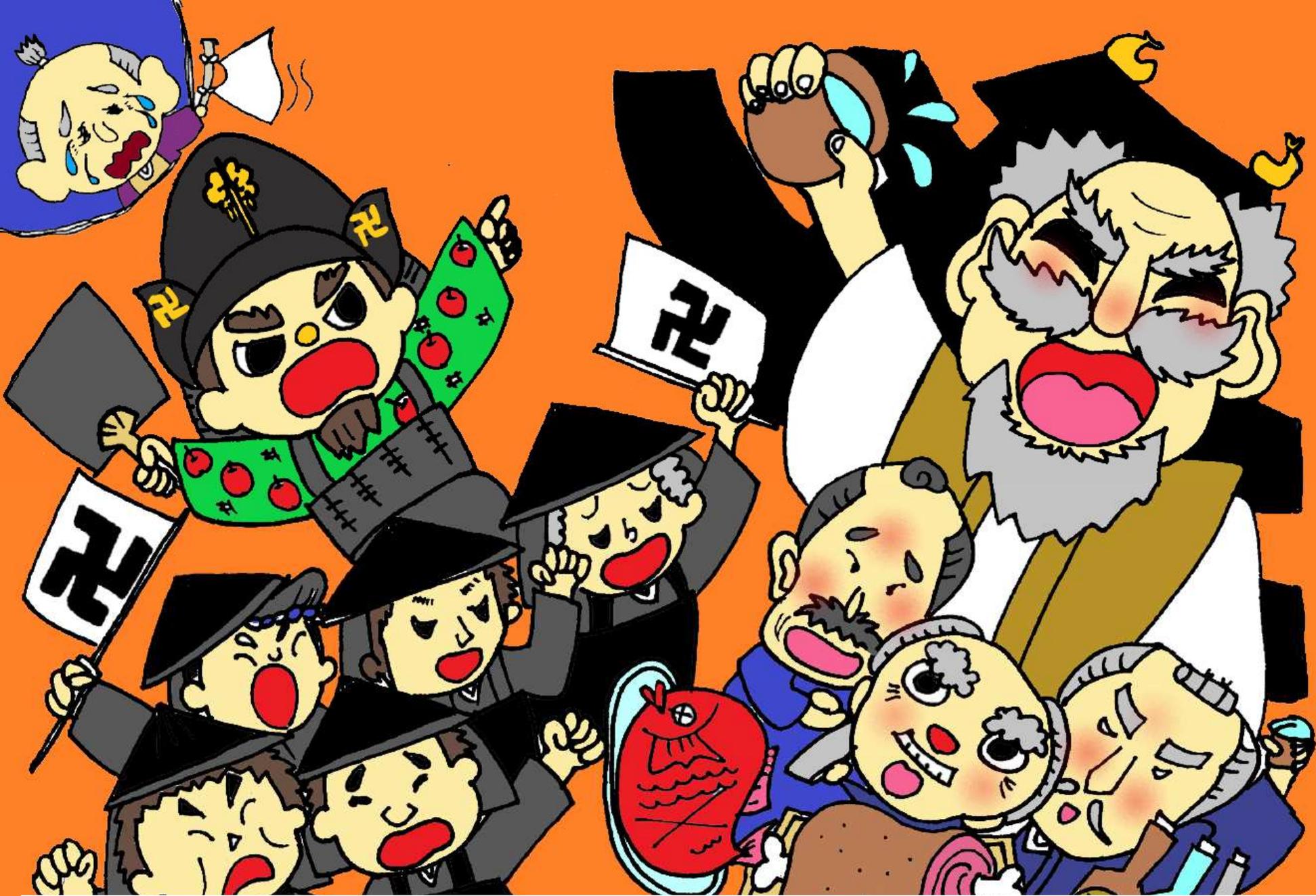


大浦ではこの三人の重臣と付いてきた兵達におもいきり飲ませ食いさせ、歓待しました。そして三日目に、大量のお土産を持たせて石川まで送りました。

食べて、飲んで余るような土産まで貰った重臣達と家来達はいい気持ちになって家に帰り、一気に眠ってしまいました。



その晩、目と鼻の先の堀越城から、人夫に化けていた為信の家来達は一気に石川城に攻めてきて、油断していた石川城を攻め落としました。

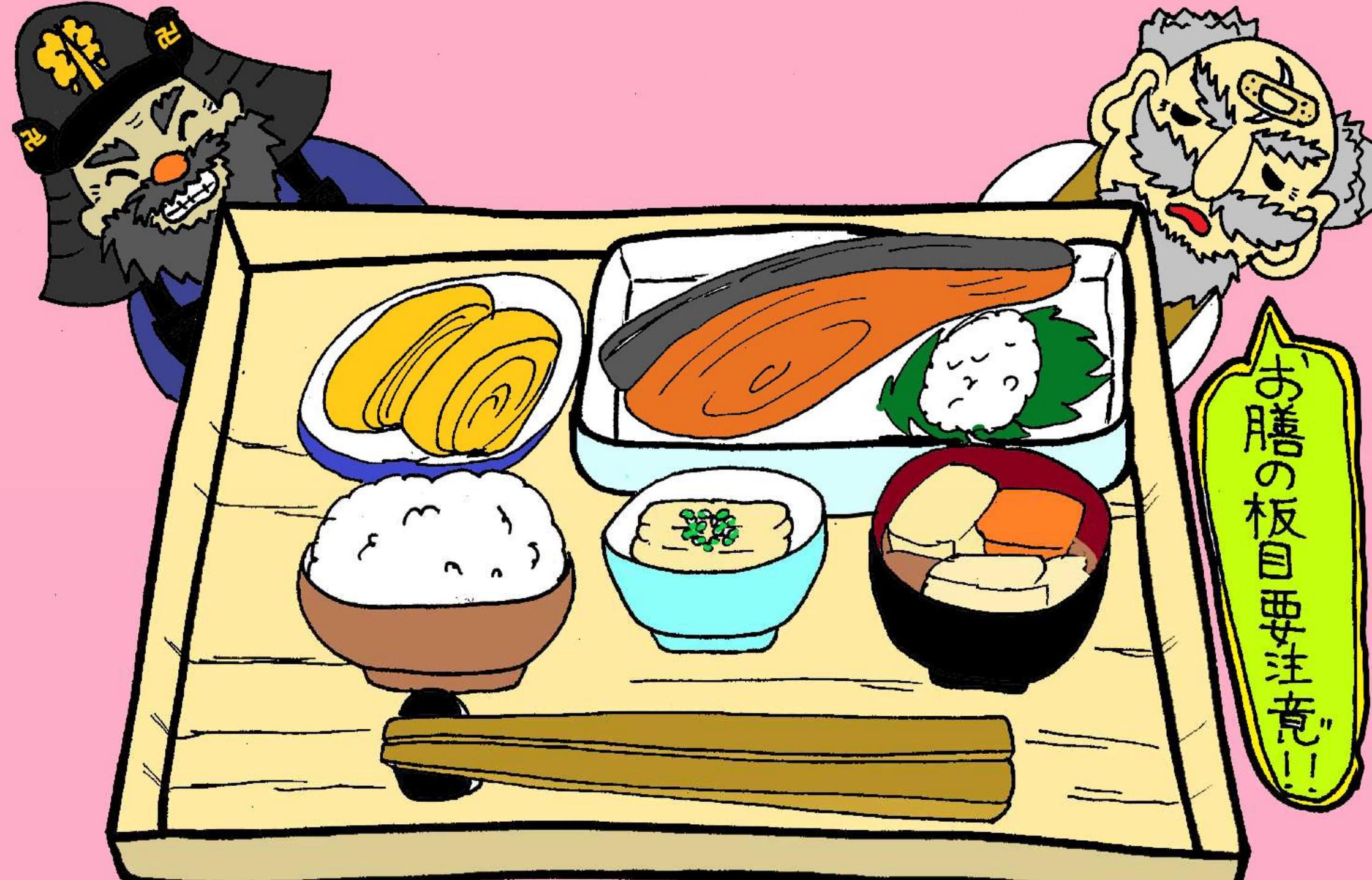


そして、その知らせが和徳城に届かぬうちに、とって返してその夜のうちに和徳城を攻め、これも攻め取りました。

和徳城主小山内讃岐の守という人は猛将でありましたが、この晩は家来達とお膳並べて酒盛りをしていました。



突然乱入してきた敵将の刃を刀を抜くのも間に合わず、とっさに目の前あったお膳を持ってパツと防ぎました。ところが、そのお膳の板の目が柾目であって、その板目を縦にしていたため、敵の刀がスパツとそのお膳を斬って、讃岐の守の眉間もズバツと割りました。



それから和徳村の人達は、お膳を置くときには、必ず板目を横にして置くようになりました。これも、どうしてそうなったかという話でした。おしまい。